

# ふれ合い恐怖心性と親子関係との関連について

—Parental Bonding Instrument (PBI) を用いた検討—

伊藤 亮  
愛知学泉大学

## The Relationship between Tendency to avoid intimacy and Parental-relationship in Adolescence

Ryo Ito

キーワード：ふれ合い恐怖心性 tendency to avoid intimacy、親子関係 parental relationship、PBI Parental Bonding Instrument、家庭支援 family support

### 1. 問題と目的

#### 1) 対人恐怖症からふれ合い恐怖症へ

今日の若者においては、対人場面での困難を訴えるものの、赤面や視線などの対人恐怖症状が不明確であり、従来の対人恐怖の枠組みには当てはまらない症例が報告されるようになってきた<sup>9) 11)</sup>。長谷川<sup>3)</sup>では、漠然とした対人緊張を訴えるものの、具体的な身体へのこだわりを対人関係の困難の理由としない新しい対人恐怖の出現が報告されている。

その中で、山田ほか<sup>19)</sup>は、“ふれ合い恐怖症”という症状群の存在を報告している。山田ほか<sup>19)</sup>によれば、ふれ合い恐怖症は、赤面恐怖や視線恐怖などの対人恐怖症にみられる身体的主題を訴えず、会食・雑談場面などの人間関係が深まる場になると不安や漠然とした対人困難感を生じるという病態である。これらの特徴から、山田ほか<sup>19)</sup>はふれ合い恐怖症を“ふれ合いの場での対人恐怖”としており、福井<sup>2)</sup>においても“新しいタイプの対人恐怖”と位置づけられている。

山田ほか<sup>19)</sup>では、ふれ合い恐怖症者の特徴として、学業や機械的な関わりなどの浅い人間関係は上手にこなすことができるが、自力では

情緒的な深いつき合いができないことが指摘されている。さらに山田<sup>20) 21)</sup>では、ふれ合い恐怖症者は、日常生活で困難を生じることは少なく、治療対象となし難いものが多いが、ふれ合い恐怖症者の周りの者は、ふれ合い恐怖症者に困惑を感じる人が多いとされており、自身の情緒的な思いを言語化できず“悩みを悩めない”状態にあり、当たり前の対人関係を築くことが難しい“サブクリニカルな問題性格群”と位置づけられている。

#### 2) ふれ合い恐怖心性

一般青年においてもふれ合い恐怖症様の心理的傾向、すなわち“ふれ合い恐怖心性”が広くみられることが指摘されてきている<sup>13) 14)</sup>。ふれ合い恐怖心性は、“他者との関係性や自己の在り方について関心が低く、ただ漠然と対人関係から退却する心理的傾向”であり、岡田<sup>14)</sup>は、一般青年においてふれ合い恐怖症様の状態が比較的継続的に続いている傾向を指して“ふれ合い恐怖心性”と名づけている。福井<sup>1)</sup>では、山田ほか<sup>19)</sup>の臨床知見を基に、一般青年にみられるふれ合い恐怖心性について、“人間関係が深まる場で漠然とした不安を感じ、他者と親しい関係を築くことに困難を生じる、ふれ合い恐怖

様の心理的傾向”であると述べられている。また、岡田<sup>14)</sup>や伊藤ほか<sup>4)</sup>においても、ふれ合い恐怖心性の高い青年が一定数存在することが確認されている。対人恐怖心性においては、自己のあり方や他者との関係性に関する葛藤が悩みの主体であった。しかしながら、ふれ合い恐怖心性においては、自己と他者の間に生じると考えられる葛藤に関してほとんど関連を見出すことができないこと、自力では情緒的な深いつき合いができないこと、自身の情緒的な思いを言語化できず“悩みを悩めない”状態にあり、当たり前前の対人関係を築くことが難しいことが指摘されている。これらの点からふれ合い恐怖心性は、対人恐怖心性とはいささか異なる青年期心性とされている<sup>13) 14)</sup>。

### 3) ふれ合い恐怖心性と親子関係

ふれ合い恐怖症に類似する対人恐怖症に影響を及ぼす親子関係については、権威的・強力型の父親像の影響が強いこと、強力性を持った母親の影響、母親との密着した関係や過保護が背景にあるという指摘がなされている<sup>8) 10) 18) 19)</sup>。特に牛島<sup>17)</sup>においては、対人恐怖症にみられる唯我独尊の自己は幼児期最早期の母子関係における万能体験から生じ、一方で、ひどく理想化された権威的な父親像が症状の在り様に大きく関わっていると指摘されているなど、対人恐怖症における親子関係の影響は数多くの指摘がなされてきている。

では、対人恐怖に類するふれ合い恐怖の基底要因としてはどのようなものが考えられるのだろうか。伊藤ほか<sup>5)</sup>は、ふれ合い恐怖心性に影響を及ぼす要因として、自己愛的脆弱性との関連を指摘している。一方で、ふれ合い恐怖症に影響を及ぼす要因としては、親子関係との関連についての指摘がなされてきている。山田ほか<sup>19)</sup>や山田<sup>20)</sup>は、ふれ合い恐怖の親子関係について、生育暦やロールシャッハテストなどの結果から考察を行っている。山田ほか<sup>19)</sup>によれば、ふれ合い恐怖の青年では、父親は存在感が希薄で、影響力が弱かったという結果が示されている。また、母親に関しては、母親イメージは母性に欠けたアニムス的な母親像である。ふれ合い恐怖症者における生育暦の聴取から得

られた知見としては、「本などは買い与えてくれたが、やさしい言葉をかけてもらえなかった」など、情緒的に乏しい養育体験を経てきたと訴える者が多かったことが報告されている。さらに、学業への牽引が強いものの、温かい言葉をあまりかけてもらえなかったこと、情緒的交流に乏しく、幼いころにおいて同年代の他者の輪に加わっていくための見本となるような関わりを示してもらえなかったことがあげられている。

### 4) 本研究の仮説

以上のように、臨床的知見においては、ふれ合い恐怖症の親子関係、特に母親関係との関連について指摘がなされてきている。しかしながら、青年期におけるふれ合い恐怖心性に関しては、親子関係に着目した実証的検討はこれまでほとんどみられていない。そのため、本研究では、青年が体験してきた親の養育態度を測定する Parental Bonding Instrument (PBI) を用いて、ふれ合い恐怖心性と親の養育態度との関連について検討を行うこととした。

親からの養育体験を測定する尺度は多く存在するが、中でも Parker ほか<sup>15)</sup>の開発した“Parental Bonding Instrument (PBI)”が世界的にも広く用いられている。PBIは、16歳までの親の養育態度を“care (養護)”, “over-protection (過保護)”の2次元で評価する尺度であり、親子関係がどの程度本人に内在化されているかを測ることができると考えられている。

先行研究からすれば、ふれ合い恐怖症と父親との間には情緒的に希薄な関係があったことが指摘されてきた。従って、ふれ合い恐怖心性においても父親の Care の高さが負の影響を及ぼしているのではないかと考えられる。また、母親との間には情緒的な交流が乏しく、学業などを強いる関わりが強かったということから、権威的な関係である over-protection の高さが正の影響を及ぼしているのではないかと考えられる。一方、山田ほか<sup>19)</sup>や山田<sup>20) 21)</sup>、福井<sup>2)</sup>では、ふれ合い恐怖の青年が対人関係での“ふれ合い”を深めるためには母性的援助が必要であること指摘されている。このことから考えれば、ふれ合い恐怖心性は、母親の情緒的な関わ

り Care の高さによって軽減されるのではないかと考えられる。

以上より、本研究の仮説を以下にあげる。

1. ふれ合い恐怖心性の高さは、父親の Care の高さとは負の関連があるだろう。
2. ふれ合い恐怖心性の高さは母親の Care の高さとは負の関連が、母親の over-protection の高さとは正の関連があるだろう。

## 2. 方法

### 1) 調査時期および対象者

2006年6月から7月にかけて東海地方の専門学校生、大学生、大学院生を対象に、講義時間を利用して口頭で調査の説明を行い、同意が得られた者に質問紙調査を実施した。489名から回答が得られ、欠損のある回答を除いた428名（男性176名、女性252名、平均年齢19.51歳）を分析の対象とした。

### 2) 質問紙の構成

1. 親の養育態度：親の養育態度を測定する尺度として、Parkerほか<sup>15)</sup>によって作成された Parental Bonding Instrument (PBI) の日本語版<sup>12)</sup>を用いた。PBIは、16歳までの両親の養育態度を回顧的に尋ねる尺度であり、父親、母親についてそれぞれ25項目、全50項目、“情緒的暖かさ—感情的拒絶”の次元を測定する“care (養護)”因子、“厳格な統制—自立の育成”の次元を測定する“over-protection (過保護)”因子の2因子からなる。回答は、それぞれの項目について、“まったく違う”(0点)か

ら“非常にそうだ”(3点)の4件法で評価を行った。

### 2. ふれ合い恐怖心性

一般青年のふれ合い恐怖心性を測定する尺度として、福井<sup>1)</sup>のふれ合い恐怖尺度全20項目を用いた。ふれ合い恐怖尺度は、①“対面不安”：対面している他者と親しい二人だけの関係へ移行することへの拒否感・不安感を示す、②“友人関係形成困難”：友だちと親密な二人だけの関係を形成することが困難な様子を示す、の2因子からなるとされる。回答は、それぞれの項目について“あてはまらない”(1点)から“あてはまる”(5点)の5件法で評価を行った。

## 3. 結果

### 1) 各変数の記述統計

全ての変数の平均値および標準偏差、および男女差についてのt検定結果をTable 1に示す。t検定の結果、母親のcare得点については女性の方が男性よりも高いことが示されたが、他の変数では有意な差はみられなかった。そのため、以下の分析では回答者全体を対象として分析を行った。各変数の $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha = .81 \sim \alpha = .92$ の間にあり、十分な内的整合性が確認された。

### 2) 各変数における単相関分析

ふれ合い恐怖心性と養育態度との関連を調べるために単相関分析を行った(Table 2)。その結果、ふれ合い恐怖心性総得点および対面不安、

Table1 各変数の記述統計および男女差

	全体 (428名)		男性 (176名)		女性 (252名)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
父親 care	22.48	7.72	21.81	6.77	22.95	8.29	
over-protection	11.30	5.80	11.01	5.54	11.50	5.97	
母親 care	24.89	5.86	23.97	6.07	25.53	5.64	t=2.69 **
over-protection	12.35	6.34	12.63	6.73	12.15	6.06	
ふれ合い恐怖心性	40.82	14.48	41.78	14.94	40.14	14.13	
対面不安	15.90	6.18	16.42	6.28	15.54	6.10	
友人関係形成困難	24.92	9.39	25.36	9.75	24.61	9.14	

\* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001

Table2 各変数の相関係数

	父親		母親		ふれ合い恐怖心性	対面不安	友人関係形成困難
	care	over-pro	care	over-pro			
父親 care	-	-.28 ***	.50 ***	-.21 ***	-.31 ***	-.25 ***	-.32 ***
over-protection		-	-.30 ***	.59 ***	.20 ***	.13 **	.22 ***
母親 care			-	-.39 ***	-.23 ***	-.16 ***	-.25 ***
over-protection				-	.23 ***	.17 ***	.24 ***
ふれ合い恐怖心性					-	.89 ***	.95 ***
対面不安						-	.72 ***
友人関係形成困難							-

\* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001

友人関係形成困難で父親および母親の care と負の相関を、父親および母親の over-protection とは正の相関を示した。

### 3) ふれ合い恐怖心性総得点および下位尺度を従属変数とした重回帰分析

親の養育態度がふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について検討するために、ふれ合い恐怖心性の総得点および各下位因子を従属変数、PBIの各因子を独立変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table3）。その結果、ふれ合い恐怖心性総得点および各下位因子において重回帰係数（ $R^2$ ）は有意であった（ふれ合い恐怖心性総得点、 $R^2=.12$ ,  $p<.001$ ；対面不安、 $R^2=.07$ ,  $p<.001$ ；友人関係形成困難、 $R^2=.13$ ,  $p<.001$ ）。結果から、ふれ合い恐怖心性総得点および対面不安、友人関係形成困難の各変数で父親の care が負の影響を及ぼしていた（それぞれ、 $\beta=-.25$ ,  $p<.001$ ； $\beta=-.22$ ,  $p<.001$ ； $\beta=-.24$ ,  $p<.001$ ）。また、母親の over-protection がすべての変数に

正の影響を及ぼしていた（それぞれ、 $\beta=.14$ ,  $p<.05$ ； $\beta=.12$ ,  $p<.05$ ； $\beta=.14$ ,  $p<.05$ ）。

結果から、ふれ合い恐怖心性には父親の care が負の影響を、母親の over-protection が正の影響を及ぼしていることが示された。この結果は、ふれ合い恐怖心性においては、父親の「受容的な態度」および母親の「厳格な態度」が影響を及ぼしている可能性が示唆される。

## 4. 考察

### 1) 父親の養育態度との関連

父親の養育態度との関連について、単相関分析および重回帰分析から、父親の care がふれ合い恐怖心性および下位尺度に負の関連があることが示され、仮説 1 を支持する結果が得られた。ふれ合い恐怖心性には父親の care が負の影響を及ぼしていたことについて、ふれ合い恐怖の青年がふれ合いを深めるためには、“受容的な母性的援助”が必要であることが指摘されている

Table3 ふれ合い恐怖心性総得点および下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析

	ふれ合い恐怖心性	従属変数	
		対面不安	友人関係形成困難
父親 care	-.25 ***	-.22 ***	-.24 ***
over-protection	.04	.00	.06
母親 care	-.04	.00	-.05
over-protection	.14 *	.12 *	.14 *
$R^2$	.13 ***	.07 ***	.14 ***
調整済み $R^2$	.12 ***	.07 ***	.13 ***

\* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001

2・19・20)。しかしながら、本研究の結果は臨床的知見、すなわち母性的援助の重要性を支持する結果は得られず、父親の受容的な態度の重要性が示唆される結果が得られた。杉山・井上<sup>16)</sup>は、対人関係を回避する青年を理解し、援助する視点として、父親の受容的な態度が有効であることを指摘している。

青年における父親イメージは、“対人関係のモデル”や“青年の自立性の基盤”として機能することが指摘されている<sup>21)</sup>。Kohut<sup>6・7)</sup>によれば、平静を備えた親と一体化し、強い不安や感情が緩和される経験を繰り返すことで、理想化された親のイメージが内在化されると述べている。このことからすれば、本研究の結果は、強い不安や感情が生じた場合に、父親が愛情深く接することによって父親との一体化がなされ、不安が緩和される体験となることを示唆していると考えられる。そのような体験が繰り返されることによって、平静を備えた父親像が内在化され、結果として他者との親密な関わりが必要とされる場においても、ふれ合い恐怖心性が抑制される可能性があると考えられる。本研究の結果から考えれば、父親の関心や温かさといった受容的な態度が内在化されることによって、青年の自立性が機能し始め、他者との関係性における苦しさであるふれ合い恐怖心性が軽減される可能性があるのではないかと考えられる。

## 2) 母親の養育態度との関連

母親の養育態度との関連については、母親の **over-protection** が全ての変数に正の影響を及ぼしており、仮説2を支持する結果が得られた。この結果は、ふれ合い恐怖心性が強力にアニムス的な母親の影響を受けてきたという指摘（山田ほか、19・20・21）と一致するものである。ふれ合い恐怖心性については、干渉やコントロールといった母親の過保護さによって、生活場面や対人場面における自立性が阻害されてきたため、対人関係において“自らの力でふれ合いを深める”という他者との関わりについてのスキルが十分に獲得できなかったのではないかと考えられる。そのため、他者と親密な対人関係を築く“ふれ合い”の場面におかれた場合には、他者と適切な交流の仕方が分からず、拒否感・不安

感を生じるのではないかと考えられる。この結果から考えれば、青年期における親密さの形成というテーマが中核であるふれ合い恐怖心性においては、親からの心理的自立・自我同一性の形成という成長課題をクリアできない状態にあり、ふれ合い恐怖心性が高まりやすくなる可能性が示唆される。

一方、本研究の結果からは、ふれ合い恐怖心性は母親の **care** からの影響は見られなかった。臨床的知見に示されているように、ふれ合い恐怖心性を抱える者においては、母親の情緒的な関わりが内在化されていないことが指摘されていることから、本研究において母親の **care** と有意な関連が見られなかったのは臨床的知見を支持する結果であるといえる。ふれ合い恐怖心性においては、母親から与えられるはずであった情緒的交流のモデルが示されてこなかったために、他者との関係形成において基本となる情緒的なやり取りを行うスキルが不十分な状態にあり、他者との親密な関係を形成することが困難になっているのではないかと考えられる。しかしながら、本研究の結果からでは、母親の関わりの方の十分さや幼少期におけるスキル形成への影響に関しては十分な検討を行うことは難しく、今後、さらなる検討が必要であろう。

## 5. まとめと今後の課題

本研究の結果から、ふれ合い恐怖心性においては、父親においては **Care** を主体とする「やさしい」父親像との関連が、母親においては **over-protection** を主体とする「強力な」母親像との関連が見出された。これらの結果は、山田ほか<sup>19)</sup>におけるふれ合い恐怖症者の親子像（弱力形の父親と、アニムス的な強力な母親）に関する臨床的知見を実証的に支持するものであり、対人恐怖症における親子関係との相違が伺える結果であるといえる。本研究の結果からすれば、ふれ合い恐怖心性の高い者の他者との関わりを支援する場合には、母性的援助よりも、父親の受容的な役割を示すような関わりが有効であると考えられる。ふれ合い恐怖の親子研究においては、これまで母親の関わり的重要性は強調されてきたものの、父親の影響についてはほとん

ど示されてこなかった。本研究の結果は、ふれ合い恐怖心性における父親存在の重要性が示されたものであるといえる。今後は、父親と母親の関連性を含めた家族全体の関係性に焦点をあてた検討を行っていく必要があるだろう。

最後に本研究の問題を挙げる。分析の結果、全変数に関して統計的に有意な値が認められた。しかしながら、説明率 ( $R^2$ ) は十分高い値を示しているとはいえなかった。この結果からすれば、ふれ合い恐怖心性には、親の養育態度だけでなく、同年代の他者との関係性が影響を及ぼしている可能性を示唆するのではないかと考えられる。今後は、友人関係との関連などから検討を行う必要があるだろう。

## 引用文献

- 1) 福井康之：女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖 人間性心理学研究, **21**, 187-197(2003).
- 2) 福井康之：青年期の対人恐怖 —自己試練の苦悩から人格成熟へ— 金剛出版 (2007).
- 3) 長谷川雅雄：「軽症対人恐怖」とその心理的援助 アカデミア人文・社会 (南山大学), **55**, 101-145 (1992).
- 4) 伊藤亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上隆：現代青年における“ふれ合い恐怖心性”と抑うつおよび自我同一性との関連, パーソナリティ研究, **16**, 396-405, (2008) .
- 5) 伊藤亮・村瀬聡美・金井篤子：過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について —自己愛的脆弱性尺度を用いた検討—, パーソナリティ研究, **19**, 181-190 (2011).
- 6) Kohut, H. : *The analysis of the self*. New York : International Universities Press (1971). (水野信義・笠原 嘉(監訳):自己の分析 みすず書房 , 1994)
- 7) Kohut, H. : *The restoration of the self*. Madison : International Universities Press (1977). (本城秀二・笠原 嘉(監訳):自己の修復 みすず書房, 1995)
- 8) 鍋田恭孝：対人恐怖・醜形恐怖 金剛出版 (1997).
- 9) 成田善弘：対人恐怖症 —最近の見解—, 現代精神医学体系, 中山書店, pp.171-185 (1988).
- 10) 永井 徹：対人恐怖の心理 —対人関係の悩みの分析— サイエンス社 (1994).
- 11) 中村 敬・塩路理恵子：対人恐怖症とひきこもり 臨床精神医学, **26**, 1169-1176 (1997).
- 12) 小川雅美：PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性・妥当性に関する研究, 精神科治療学, **6**, 1193-1201 (1991).
- 13) 岡田 努：現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170 (1993).
- 14) 岡田 努：現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察, 性格心理学研究, **10**, 69-83 (2002).
- 15) Parker, G., Tupling, H, &Brown, L. B. : A Parental Bonding Instrument British Journal of Medical Psychology, **52**, 1-10 (1979).
- 16) 杉山明子・井上果子：青年期における回避傾向に関する調査研究 —基本的信頼感, 養育態度との関連— 心理臨床学研究, **24**, 419-429 (2006).
- 17) 牛島定信：心の健康を求めて (20) 対人恐怖症 —一生の欲望, 甘え, そして唯我独尊— 教育と医学, **48**, 767-773 (1997).
- 18) 内沼幸雄：対人恐怖の症状構造 精神神経学雑誌, **73**, 359-396 (1971).
- 19) 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子：問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報) —ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究— 安田生命社会事業団研究助成論文集, **23**, 206-215 (1987).
- 20) 山田和夫：境界例の周辺 —サブクリニカルな問題性格群— 季刊精神療法, **15**, 350-360 (1989).
- 21) 山田和夫：「ふれ合い」を恐れる心理 —青少年の“攻撃性”の裏側にひそむもの— 亜紀書房 (2002).